習作：魔法より武術で頑張ります

雪凪

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法が下手な少年が武術で頑張るお話・・・・・かも

作者は素人なので下手です。そこの所を注意して読んでください。

ちなみにＶｉｖｉｄで話を進めます。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 4
3話 …… 9
第4話 …… 16
第5話 …… 20

第1話

ミッドチルダ市内　夕刻

（さすがに少し遅くなりすぎたか？こうゆう時にデバイスがないと不便だな、まぁ持っていても魔法を殆ど使えない俺じゃ意味ないか、あんまり遅いとお隣がうるさいし）

辺りは既に暗く街灯が灯り始めていた。

そんな中誰かが少年の方を見ている。

少年は足を止め。

（さっきから誰かに見られている？）

少年がそう感じた瞬間仮面を付けた女性が目の前に降りて来た。

「トウヤ　ユウキさんですね、あなたに確かめたい事があります」

「で？アンタは誰だ？」

少年の問いに仮面の女は答える。

「私はカイザーアーツ正統ハイディ・E・S・イングヴァルと『覇王』と名乗らせて頂いています」

「（カイザーアーツって昔文献で読んだことがあるな、確かベルカ時代の王様が使ってい

たとされている武術だ）で？その自称覇王様はこんなガキに何を確かめるって？」
「あなたの技と私の拳いったいどちらが強いのかです、防護服と武装をお願いします」
　そう言うと仮面の女は構えた。
「（バトルジャンキーか厄介な相手に目付けられたな）あいにく俺はデバイス持ってないんでこのまま行かせてもらうよ」
「そうですか!!」
　お互いに言い終わるとお互いに動き出した。

（つぐ早い、受け流すのがやっとで反撃の隙がない!!）
（攻撃が巧く受け流されている！このままでは決定打が入らない！なら、一撃大きいのを放つ!!）
　その瞬間、仮面の女の踏み込みが大きくなる。
（踏み込みが更に深くなった大技が来るか、さすがに受け流すのは厳しいか？なら！カウンターを打ち込むだけだ!!）
　少年もそれに気づき構えた瞬間二人の攻撃がぶつかった。

『覇王断空拳』

『灼岩拳』

お互いの攻撃がぶつかり合い二人とも後方に飛ばされている。

煙で見えにくいが少年の方のダメージが大きいようだ。

（がぁ、やべぇ意識が飛びかけた…だけど確実にコッチの攻撃も入ったはず）

（くっ、カウンターで貰った一撃のダメージが大きいです、ですがさすがにむこうもダメージが大きいはず）

二人が次の攻撃に備えようとした瞬間、別の人影が現れた。

「そこまでです！管理局員ですここで誰かが暴れていると通報がありました、二人とも武装解除しておとなしくしてください！」

局員がそう言い終わる前に既に二人はその場から離れていた。

少年は入り組んだ路地の中に仮面の女性は夜の暗闇に消えていった。

「あ！ちょっと待ちなさい!!せめて子供の方だけでも捕まえて事情を聞かないと！って、こんな狭い路地通れないし、もう暗くて見失っちゃったし」

「これって報告しないとやっぱりダメだよね。はぁ」

局員の言葉は暗い夜の町にむなしく吸い込まれた。

第２話

陸士１０８隊隊舎　２０：００

先ほど二人を逃がしてしまった局員が行った先で待っていたのは局員の上司の中年の男が居た。

「で、暴れていた二人は捕まえたのか？」

局員が部屋に入ると最初にそれを聞かれた。

「いえ・・・その・・逃げられてしまいました・・・・」

局員がそう言うと上司は怒るでもなく「映像は取っているか」とたずねる。

「ハイ！少し荒いですが映像は押さえています、それと一人は前から言われている連続障害事件の容疑者と容姿が一致しました」

「もう一人の人物は？」

「少年の方はおそらく被害に有った方かと思われます、これがその少年の映像です」

局員はそう言ってモニターに少年の映像を映し出した。

その映像をみて上司は固まってしまう。

「どうかされましたか？ナカジマ隊長」

「いや、知っているやつだったからな」
「こいつは、家の隣に住んでいるガキだ、後でギンガかスバルに説教させとく、連続傷害事件の容疑者の方は被害届が出てないが他の隊員達にも回して警戒させておけ」
「分かりました、では失礼します」
そう言って局員は退室していった。

ユウキ家　２０：４０
暗い部屋のソファーで少年が静かに横になっている。
（一時間近く経つのにさっきのダメージがまだ抜けきらねー骨やっちまったか？）
少年がそんな事を考えているとチャイムが鳴り響いた。
（誰だ？こんな時間に）
少年がドアを開けるとそこには1人の女性が居た。
「ノーヴェさんですか、こんな時間にどうしたんですか？」
「どうした？じゃ、ないだろ、お前最近噂の通り魔と戦ったそうじゃねーか」
少年の問いにノーヴェが怒りながら答える。
「なんでそんな事知ってるんですか・・・」

「さっきギンガから最近通り魔が出てるから気をつけろってのと、お前が通り魔と戦ってボコボコにされたって連絡があった」
「一回家に来て傷見せろ、それからギンガとおとーさんが帰ったら説教するって言ってたからな」
「了解です・・・・」

ナカジマ家からの説教が終わりゆっくりしていた頃
「そういえばトウヤはどうして防護服なしで無事だったスか?」
いきなりウェンディーが聞いて来た。
他のナカジマ家の人達も気になっていたのだろか喋るまで返さない雰囲気になってしまった。
「別に特別な事はしてないですよ、魔力で強化してただけですから」
少年の言葉に数人を覗いて納得してくれたようだ。
「でもトウヤって魔法使えないんじゃなかったスか?」
ウェンディーの言う通りトウヤは自分で魔法は苦手と公言している。
「いや苦手なだけで強化魔法とか魔力放出位は出来るぞ」

トウヤのその言葉にウェンディーをやっと納得くれたようだ。
「デバイスが有ればもう少しマシになるけど自分に合ったデバイスがないからなー」
「レアスキルの所為だっけ？」
「そうだよギンガさん、正確にはレアスキルじゃないけどね。名前は『気功〈ストラ〉』」
ギンガと呼ばれた女性の問いにトウヤが答えた。
「ちょっと特殊な呼吸法が居るけど便利なんだよね、でも既存のデバイスが認識してくれないのが欠点かなー、はぁ」
「今の処はデバイス無しで出来る簡単な強化魔法とストラと魔力を合わせて放出位しか出来ないんだよね」
トウヤはそう言って少し寂しそうな顔になる。
「ストラって具体的に何が出来るの？」
「スバルには俺、何度も説明しなかった？」
スバルと言われた女性の質問に不機嫌になりながらもトウヤは答える。
「ストラの活用法としては拳や身体の強化、自分自身や他の人の身体を活性化させて傷や肩こりを癒す事が出来るよ」
肩こりを癒せるとトウヤが言った瞬間周りの目つきが変わる。
「今肩こりに効くって言ったよね!?」

「え、ハイそうです「よし!・今日の罰として皆の肩こり治療お願いしようかな!」」
ギンガがそう言うと他の女性陣からも期待の視線が来る。
「はぁ、分かりました、さすがに今日の事は自分が悪いですから罰は受けます」
トウヤはそう言うと準備に取りかかる。
「あたしはいいや変わりに明日ヴィヴィオ達と組み手するからお前も一緒にするぞ、拒否権はないからな」
「了解です（ヴィヴィオってノーヴェさんがストライクアーツを教えている子だっけ?・）
ノーヴェさんと組み手って今までやった事なかったな」
「おう、だから一度お前の腕見ときたかったんだヴィヴィオのやつにもお前の事話したら会いたがっていたしな」
そんな話をして全員の治療を終らせた後ナカジマ家を後にした。
明日の予定を楽しみにしながらトウヤは家に帰った。

3話

早朝のミッドチルダ市街そこを走る人影トウヤが居る。
前日の大怪我が嘘のように平然と走っている。
その汗の量から相当な距離を走っていたのだろう。
（ふぅ、さすがに昨日の怪我が響いてるな、今日は何時もの半分も走れなかった）
そんな事を考えながら家に戻りシャワーを浴びて朝食の準備をする。
トウヤがご飯を食べながら今年のインターミドル・チャンピオンシップの情報を見ていた。
「やっぱり今回もデバイス無いと参加無理か、ストラを使えて行動を阻害しないデバイス探すのは、やっぱり無理が有るのか・・・今日学校終ってノーヴェさん達との約束まで時間あるし設計から考え直すか？」
今日の予定を組みながら朝食を済ませ鞄を取り家から出る。
（ブースト系のデバイスを作るのは、もう決めてるから後はデザインと性能をどうするか・・・今までストラを認識出来るのは作れたけど今度は魔法がちゃんと発動しなくて

デバイスの意味が無くなったし、いっその事最低限の性能だけ詰めて後は全部自分でコントロールするか？）

そんな事を考えながら通学路を走って学院に向かう。

体育の授業で、二人一組で模擬戦をすることになった。

トウヤはなるべく強い人と組もうとクラスメイトを見ていると教師２人名前が呼ばれた。

「トウヤ　ユウキとアインハルト・ストラトス二人ともコッチに来い！！」

突然教師から呼ばれ驚きながらもトウヤともう一人が教師の元へ向かう。

「他の生徒ではお前達の実力に付いて来れないと判断した為お前達二人は今後二人で組んでもらうことになった！」

教師の言葉に戸惑いながらも二人は了承した。

それから二人はお互いに自己紹介をし、組み手をすることになった。

「初めまして、アインハルト・ストラトスです」

「こちらこそ初めましてトウヤ　ユウキです、これからよろしくお願いします」

お互いに噂だけは聞いていたが初対面の所為か少しぎこちない挨拶となった。

「それじゃあ、模擬戦を始めますか！」

トウヤの言葉に反応しアインハルトも構えた。
「よろしくお願いします」
その言葉とともに二人は組み手（戦闘）を始めた。
二人の模擬戦は素人から見ても綺麗な物でお互いに攻撃を繰り出しては受け流しの連続でその最中にお互いの癖やモーションを確認しながら戦っている。
そんな中トウヤはアインハルトの戦い方に違和感を覚えた。
模擬戦終了後先ほどの事が気になったトウヤはアインハルトに尋ねた。
「ストラトスさんキミってどちらかと言うと剛の戦い方だよね？さっきからコッチの『何か』を警戒してか威力のある打撃を打って来てないし」
「ええ、ユウキさんは、今までカウンターの一撃で相手を倒していたと聞いていたのでそれを警戒していました」
アインハルトの言うとおりトウヤは、初等部時代は殆どの戦いをカウンターで決めていた。
「その所為か、あれは、相手がただ突撃思考が多かったからカウンターが決まっただけで俺の本来の戦い方は、手数と重い一撃だぞ」
その言葉にアインハルトは驚いたようだ。
それもそのはず自分の本来の戦い方ではないにも関わらずそれを苦とせずやってての

けたのだから。
「あ、そうだ今後はアインハルトって呼んで良いか？俺、気に入った相手は名前で呼ぶようにしてるから」
「いいですよ、なら私もトウヤと呼ばせてもらいます」
ここに若き格闘家の友情が芽生えた・・・・はず。

学院も終わり昨日ノーヴェと約束していた組み手を行うためトウヤは中央第４区の公民館に向かっていた。
（ノーヴェさん達は、教会に寄ってから来るって言ってたから少し寄り道していこうかな・・・・・近くにジャンク屋も有るからデバイスに使えるパーツ買っていこう！）
ジャンク屋にてトウヤがパーツを探していると不思議な結晶が目に入った。
「（なんだろこの結晶中にXIって刻んであるのかな？）親父さんこの結晶なに？」
トウヤの問いに店主は昔拾った物でそこに置いているだけだと言った。
「（もしかしたらデバイスのコアに使えるかもしれない・・・買えるなら買おう！）親父さんこの結晶幾ら？」
店主はただの綺麗な結晶だからそっちで決めてくれと言って来た。

「じゃあ、このパーツとかと一緒に買うからこれ位ね！」
トウヤはお金を払い目当てのパーツと結晶を買い店を後にする。

そんなこんなで時間も経ちトウヤとノーヴェ達は合流し初対面同士の挨拶も終わりそれぞれ運動着に着替えに向かった。

ヴィヴィオ達のスパーを見ながらノーヴェとトウヤがスパーをしている。
「あの子達もそこそこ出来るんですね、さすがノーヴェさんが教えてるだけわ有りますね」
「まぁな、だけどよそ見しながらスパーって案外余裕有るのか？お前」
「ええ、まだこのペースなら余裕です！少しペース上げても良いですか？」
トウヤはそう言って答えを聞く前にペースを上げ始めた。

二人のスパーが終わり水分補給に戻ると目を輝かせたヴィヴィオ達が待っていた。
「すごいです！トウヤさんって強いんですね！」
ヴィヴィオのその言葉をトウヤは否定する。

「俺は、そんなに強くないよさっきのはスパーだから実際に試合をしたらノーヴェさんには勝てないと思うし」
「いや、謙遜するなってその歳であれだけ動ければ良い方だろ、それとあの動きどこで覚えたんだ?ストライクアーツとは違うようだし」
　ノーヴェはスパーの際に感じた疑問をトウヤの聞く事にした。
「どこで・・・多分、昔親父に仕込まれたんだと思います少し曖昧ですがね、最近は書物なんかを呼んでそれを覚えてを繰り返していたので動きに統一性が持てないんですよね」
「トウヤさんのお父さんって何をしている方なんですか?」
　ヴィヴィオの友人のリオと名乗った少女が何気なく質問をして来た。
　その質問に言いにくそうにトウヤは答える。
「トレジャーハンターって自分で名乗ってる、ただの犯罪者だよ・・・」
　トウヤはそう答えると乾いた笑みと怒りの笑みが混ざったような顔をした。
「いや、要注意人物指定はされてるけどまだ犯罪者認定はされてないからなお前の親父さん」
　トウヤの言葉にノーヴェは直ぐにツッコミを入れる。
「自分の中ではあの糞親父は犯罪者です、自分の子供を自分が逃げる為にピンク色の砲

撃の前に放り投げますか？普通」

そう言った途端トウヤは何かを思い出してか震えている。

「あ、フリーズしやがった仕方ない、ヴィヴィオぼちぼち組み手するか！」

「え？でも、トウヤさんは「少しそっとしておけば直るから」うん、わかった！」

その後ヴィヴィオとノーヴェの組み手が終わり帰るまでフリーズしていた為ノーヴェによる脳天チョップでトウヤの正気を戻すことになる事をまだ誰も知らない。

第４話

家に帰ると、トウヤは直ぐにデバイスの設計をし始めた。
昼間に買った結晶をコアにする事で今までよりも正常に動くようになって来ていた。
（よし！今までの中で一番まともに機能してる、しかし最初からストラをデバイスに通そうとするのが間違いだったのは泣きたくなるぜ、だけど後は最適化して強化魔法とバインド系後は今度のテストの為に射撃魔法をインストールしとかなきゃ・・・・）
トウヤは嬉しそうにそう思うと疲れを癒しに風呂に入りにいき上がってくると今度は、日課の筋トレをして布団に入った。

翌日、トウヤは朝食を軽く食べ学院に向かいながらデバイスに前々から考えていた隠し玉をインストールしていた。
（この隠し玉、放課後にでもアインハルトと組み手して試してみるか？）
そんな事を考えながら教室に入ったがアインハルトは始業時間になってもこなかった。

（何か有ったのか？まあ、それなら彼所で試すか人も居ないし・・・）
少し気になりはしたものの直ぐに気にしなくなった。

事情があり遅れてやって来たアインハルトがふと学園の並木道の方を見るとそこでトウヤが昼寝をしている。
（彼所で寝ているのはトウヤさんですよね？起こした方が良いでしょうか？そろそろお昼休みも終わりですし）
そう思いアインハルトは起こす為に近づくとトウヤがうなされている事に気がつく。
（うなされている？早く起こした方が良さそうですね）
すぐさまトウヤを起こそうと触れた瞬間トウヤが目を覚ました。
「・・・・・・アインハルトか今何時だ？」
トウヤは目を覚ますと目の前にアインハルトが居る事を疑問に思わず普通に時間を聞いて来た。
「もうすぐお昼休みが終る頃です、それとトウヤ、うなされてましたが大丈夫ですか？」
「うなされてた？・・・って事は何時もの夢見てたのか」
「夢ですか？」

「そう、時々見るんだけど自分のようで自分じゃない誰かの視点から、それだけならまだ良いんだけどその光景がまた問題で・・・戦場なんだよね多分ベルカ時代の光景だと思うんだけど」
　そう言ってトウヤは今の忘れてと言って校舎の方に歩いて行った。
「トウヤさん貴方も記憶継承者なのですか?」
　トウヤが歩いていった方を見ながらアインハルトがぽつりとつぶやく。

　夕刻、ミッドチルダ西部山林地帯
「此所に来るのも久しぶりだなー、人もいないし（何かテントあるけど気にしない方が良さそうだし）気軽に大技の練習が出来る!」
「とりあえずデバイス設定開始名前は『スターブレイカー』・・・・・・・・・・オールグリーン全設定完了、後は機動開始」
　デバイスを起動すると白衣を纏ったトウヤが居た。
「よし! 機動成功・・・稼働状態も正常・・・後は技を出しても壊れないか耐久チェックだな」
　そう一人でつぶやくとトウヤは大きな岩の前に立った。

「力を一点集中・・・一撃必殺の拳『絶拳』」

トウヤの技が当たった岩は後方に吹っ飛びながら粉々に砕け散った。

「よし！成功!!ちゃんとストラによる強化と魔力による強化が同時発動している成功だ！」

デバイスの完成と成功にテンションの上がりきったトウヤはそのまま辺りが暗くなるまで練習を始めてしまった。

その光景を一人の少女が遠くから眺めている事にも気づかないでいた。

むろん帰りが遅くなりすぎてナカジマ家の皆様に怒られたのは言うまでもない。

第５話

五月、前期テスト期間で周りが慌ただしい中トウヤとアインハルトが一緒に登校していた。
「トウヤ貴方ずいぶん余裕そうですけどテスト大丈夫なのですか？全然勉強をしていたようには見えなかったので」
「大丈夫だろ赤点は絶対取ってないし、一番危なかった射撃魔法のテストも突破出来たし」
「あれはどうかと思いましたよ、なんですかランサーを展開して手に持って投げるって・・・」
トウヤの試験のクリア方法にアインハルトはあきれ果てている。
「いや、あれでＯＫって教師陣が言ったんだから大丈夫だろ、規定では射撃魔法を発動して的にどんなやり方でも当てれば良いって書いてあったし」
そんな他愛も無い話をしていると後ろから誰かが声をかけて来た。
「アインハルトさんにトウヤさん！」
二人が振り返るとそこにはアインハルトの友人の高町ヴィヴィオが居た。

「ごきげんようアインハルトさんとトウヤさん！」
「ごきげんようヴィヴィオさん」
「ごきげんよう高町嬢！」
その後ヴィヴィオも加えて適当に喋りながら校舎に向かっていると何故かヴィヴィオまでも中等部校舎に歩いていた。
それにアインハルトも気づきヴィヴィオに教える。
「――――ヴィヴィオさんあなたの校舎はあちらでは」
ヴィヴィオもその事に気づき急いで校舎に戻ろうとするその際アインハルトからの何気ない一言に喜びながら初等部の方に向かっていった。
「さて俺たちも後残りわずかの簡単な試験終らせに行きますか！」
「トウヤその発言は気をつけてください周りがあなたを睨んでます」
そんな視線気にしないかのようにトウヤは教室へと向かっていった。

休み時間アインハルトはノーヴェから通信が入り外に向かった。
トウヤは一人教室で青空を見ているとトウヤの端末にもメールが届いた。
（何々『アインハルトも合宿参加するからお前も今年こそ合宿行くぞ！ちなみに拒否権

は使わせないからな!!』ノーヴェさん急いでたんだろうけど内容はしょり過ぎだよこれ、後完全に強制参加ですかそうですか・・・）

トウヤがうなだれているとアインハルトが戻って来た。

「どうしました?トウヤ」

その質問にトウヤは先ほどのメールをアインハルトに見せた。

「なるほどトウヤも合宿に行くのですね、なら少し安心です知ってる人が少しでもいると助かります」

アインハルトはそう言ってるがトウヤは机にうつぶせのまま何かをつぶやいてる。

（ちくしょうノーヴェさん計ったな!あんな安心した表情見せられたら逃げれないじゃないか!）

そんなこんなで試験期間も過ぎ合宿の日が訪れた。

ノーヴェとトウヤ、アインハルトの三人は一緒に高町家に向かっていた。

「二人とも試験結果どうだったんだ?」

「上々でした、ですが一つ納得出来ない事がありましたけど」

ノーヴェの問いにアンハルトはそう答えながらトウヤの方を見る。

「なんだ?俺の試験結果が総合主席だったのがそんなに以外か?」

「ええ、以外過ぎます私の知る限りトウヤは授業中寝ているか空を見ているかでしたから」
「あはは、そのことについては言い返せないがよく言うだろ能ある鷹は爪を隠すって」
二人のやり取りをノーヴェは笑いながら見ている。
「まぁ、トウヤは人の自分が頑張ってる姿見せたがらないからな」
トウヤが夜遅くまで毎日勉強している事を知っているノーヴェがフォローを入れる。
「そんな話は置いといてもう目的地の真ん前なんだけど」
高町家の前に着きノーヴェがインターホンをならす。
「ノーヴェさん自分外で待ってるので全員用意終ったら教えてください」
「何でだ、中で一緒に待てば良いだろ?」
「女性しかいない空間に入るのはキツイです・・・」
「あー、そう言う事かじゃあ此所で待っててくれなるべく急ぐから」
「ゆっくりで良いですよー」

トウヤが外で準備が終るのを待ってると金髪の女性が近づいて来た。
「お久しぶりです、フェイトさん!」
「久しぶりだね、トウヤ」

二人はどうやら知り合いだったようだ。
「ヴィヴィオからトウヤの名前を聞いた時びくりしたよ、全然コッチに顔を出してくれなかったから少し心配してたんだよ」
フェイトは優しい口調でトウヤしかる。
「すみません、ミッドに移住したときから挨拶に行こうと思ってたんですがその度に眼前に広がるピンクの光を思い出しまして・・・」
「あはは・・・なのはが聞いたら怒りそうだね・・・」
「なのはさんには悪いですけどあれだけは実際にうけないとあの恐怖は分かりませんよ・・・」
フェイトもその事に関してはものすごく同意している。

全員の準備が整い向かうは無人惑星カルナージへ４日間の合宿へレッツゴー